



^ 5
6609
2



911.35
No. 53

15
6609
2



倅塚集下

秋之部

乾坤

阿きたのやわらうと西乃江のり イセ 方行
 相をりり兄と居る秋を立子今 アハチ 梅巻
 あむより人の歩る舞る之秋の秋 チクコ 菱五
 宵静と来るを河秋を打りて イセ 風韻
 初あだのあま杖つゝわたり イセ 沙路

87856

<2000-392>

物秋也 赤くけしりて 楳の実 沙月
 稲妻也 一坐しき色く 燈籠あり 湯釜
 いまつちや まへにまぬ 秋の雪 雪
 星の秋も しくさるる 芦の風 風石
 少郎も ちかき 宵あり 天竺川 桜巻
 糸掛 ことわり 形も けり 双鳥
 今朝も 袖の巻く 有か 小袖 詠海
 洗ふも 人の子 かなぬ けり 葛古

露の玉も ちかき ことわり 風外
 吉原の ぬも 人あり けり 風の 雀鳴
 山へり 秋入る ちかき 稲の 露 茨山
 ちかき たる あり ちかき あり 井の 湯 たよ女
 雪と 秋の ちかき あり 曲 葉
 海へ ちかき 霧の ちかき あり 上ツケ 汀香
 ちかき ちかき 子 湯を ちかき あり 蒼乳
 けり ちかき ちかき ちかき あり 風 子 渡

去らるるのぬき舟 秋の風 ムサシ 暮荷
 秋風や海に面を仰ぐも 三
 青川宵をゆく舟に月の光 遠
 名月やと水ととる船も 風
 隈をくくるとも 梅
 押打てとる舟も 櫂
 花園 ト
 澄くく 舟 秋の月 池

高きれ 舟 浦 の月 沙
 月 梅
 舟 舟
 阿 白
 い 映
 十 二
 雲 有
 秋 布

善光寺

人形能く絶つ可なりき水枯れ 南

急

船争ふく川を多勢に起しん 画

志見く上河く人あまの相争は 梅室

やいそ記多やあを成る脊戸の心 青扇

又くくくく花生くくくくくくくく 柳

船争ふく上河く人あまの相争は 義香

河河くく川を多勢に起しん 雨堂

知付ハ又知くくくくくくくく 長史

象掛くくくくくくくくくく 湛

感何

人形能く薬山を能く絶つ可なり 家三

あくくく打おくくくくくくくく 子輪

眼のさあくく居くく川秋の船あま 逸洲

善光寺

植物

栲栳 アフリ 一葉 フ

一思 ムサシ 葉 杜 人

本 テハ 葉 橘

新 海 葉 葎

阿 天 葉 遊

阿 エト 葉 村

葉 耕 葉 女

我 木 葉 杜 葉 響

掃 セツ 葉 岐

我 レナノ 葉 村

我 エチコ 葉 乙 葉 良

以 メシハ 中 九 葉 無

活 スルカ 葉 有 葉 際

若 有 葉 子

出 ムサシ 葉 有 葉 臺

高下をわらむ人のあつむむ那の那 ^{シナノ} 温惠
月をくく月を河をくく一葉葉のれ ^{エツケ} 六枝
軒を秋風あふむを秋時えけり、 玄外
碑の手を秋くく一掃や夢を秋、 一即
井を秋あふむくく吟をりたてのむ、 士孝

清風徐来水波不真

芦花穂の志川、くくあふむ常、の那 菊
夢を秋くく言ひをりぬ鳥、瓜、 羽文

垣を秋くく藪をくく流く糸瓜の香 ^{ハリハ} 一香
破を秋結くく屋をえくくを秋、の那 嵐外
茅をくく下深くく淋く唐の道し 蒼虬
花をくくくくくくくくくく唐辛子 ^{キイ} 深那
葉をくくくくくくくくくく唐の道し ^{トサ} 嵐夕
一本をくくくくくくくくくく唐からくく ^{エツケ} 翠峯
内外くくくくく垣を秋、のこくれ、 梅不
とつ栗くくくくくくくくくく砂をけり、 洒清

新玉

神風も杉の葉も吹稻穂の乳

耕皇女

山家

我深くやまのりひまみちの乳

碓嶺

春の葉もまをく杉の葉もみちかな

ヒコ

席月

有明の月け掃きく人の葉の乳

十三

素屋

遠近も木竹もくく杉の葉もみちかな

トサ

休巻

月露もくく杉の葉もみちかな

四時もくく杉の葉もみちかな

あつた妙もくく杉の葉もみちかな

あつた妙もくく杉の葉もみちかな

あつた妙もくく杉の葉もみちかな

山麓に白雲をくく杉の葉もみちかな

牟地

あつた妙もくく杉の葉もみちかな

チクコ

紫巻

あつた妙もくく杉の葉もみちかな

シナノ

紫巻

あつた妙もくく杉の葉もみちかな

チク

紫巻

昔もあれはよく嘆せしむる如くの時
嘆きさらぬるも枯ゆへ聖筆の香 上ツケ 天弓

生疾

松原四山子林を刻して一語をきけ

さあ〜の古歌あとも此年をきよ

し〜弾きうれけり激言篇終り

し〜其妙感の地よ

江戸 深のうら〜あふりせきり〜
風韻

吹や〜世〜人〜もや〜り〜あ〜る〜人 京 菊

垣胡布とあふりめ〜度居とあ〜
菊

出るとあ〜あ〜川〜鳴や林の浮 エト 山外

う〜ら〜ま〜拂心あ〜たり 縁に挽 シナノ 敬高

秋に挽障子う〜ら〜ま〜り エケコ 煙山

新居のあ〜あ〜人〜あ〜れ〜り アノミ 塙山

月能雁影をう〜り〜 露〜し〜け〜
津煙

あまのついでに居も落つて岬の那 ムサシ 素仙

あまのついでに居も落つて岬の那 渡り多 ムサシ 尺二

あまのついでに居も落つて岬の那 草かき色 ムサシ 湖山

あまのついでに居も落つて岬の那 一 ムサシ 塞子

あまのついでに居も落つて岬の那 川原かき ムサシ 分尾

あまのついでに居も落つて岬の那 のきむとけり ムサシ 三和

衣食

あまのついでに居も落つて岬の那 月ねん ムサシ 右拳

あまのついでに居も落つて岬の那 ムサシ 省吾

あまのついでに居も落つて岬の那 海 ムサシ 陸徑

あまのついでに居も落つて岬の那 小袖 ムサシ 又

あまのついでに居も落つて岬の那 袖 ムサシ 西子

神解

あまのついでに居も落つて岬の那 人 ムサシ 歩文

あまのついでに居も落つて岬の那 子 ムサシ 耕雲女

あまのついでに居も落つて岬の那 けり ムサシ 角洲

燈とゆゑにさしつゝ置たり 燈籠の如 エナコ 北洋

灯をつけぬ時をけしき切籠る南 上ツケ 素三

南好まふ時ありしはる益作の如 菊

此まゝの如く人ありし 放生會 西馬

船もも元伊勢宮に市場の如 玉芝

以上ノ故事

松平好ふとん強けり 司 召 逸園

是れ年志に記しりし 狗むる 寄 乙

冬ノ部

乳坤

十月七日舟寄るに小舟川原 風調

幽ふ好む如くも 也 林喜月 十三卷 茶外

持てせぬ如くも 末敷小喜この如 キキ 詠臺

弓控へ小舟を流る小川をすてり 暮 登

小喜めくも好む茶茶の別と屠 茶耕

砂壁の好む如くは 小舟を流る 秋 畠女

山ノ降阿多ノ秋多クハ時由ク春 京池
物々多ク志々然ルモ心々トヤ莖屋
けめと冬思ふ如く思ふ如く
時由春秋物々ノ尺寸板ノ那 風橋
こたしし 西花屋古橋加きつて 岱年
青桐の切口志路 けさの秋 ヒタキ芥玉
又切つたての心々 中家の志路 畠支
朝風也橋の秋を吹かせる 舟尾

雲の垂下る ちの秋 芥 けさの秋 白
物々多ク志々然ルモ心々トヤ莖屋
けめと冬思ふ如く思ふ如く
時由春秋物々ノ尺寸板ノ那 風橋
こたしし 西花屋古橋加きつて 岱年
青桐の切口志路 けさの秋 ヒタキ芥玉
又切つたての心々 中家の志路 畠支
朝風也橋の秋を吹かせる 舟尾

蓮山はゆきゆりさへ小窓より花ニト露露女
 加へ来て通を石に空けたまき馬とす物確
 那葉畑をとり子雲乃てけりけり寸風
 日影いそ月影出けりまのへり南
 組板に銅子むりくひ雪より那エト助宣
 橋や女子うをけをけりて春が風歌
 氷さくさかへをまぬ昼乃河 舟煙
 投きれ八上つて雪より氷より那エト酒

ぬき推散花よりつてさへりこれさへ
 おあしね子まみしへの何る氷柱もヒキつ兆
 人生おとまふかよさへぬ冬籠 四山
 忽年二十四とあるれあまの詩を
 心よりおもふ年月一年程はつてり
 手よりつて散るあつてりて冬籠 夢三
 猶越へり
 冬人あつて春を握るさへさるゑ 鶯乳

梅を先う〜加ふや炉のいふ事 梅室
あきまむう〜おこれ炭やいれ 風外
藤乃実ひ肩をぬ越る楯火かき エト 乙雄
若人の袖をきききふあ〜さうふ、 山公
雪外はあきハ消る楯火う輝、 雪海
梅う〜又裾やのふほ〜さかき △サシ 折漣
梅を先う〜くも楯火乃煖うれ 梅了

山家

梅を先う〜くも楯火乃煖うれ 梅了

寺之山寺山の危危水水加加きき山山津津の山山 中水 平山
 冬冬新新報報やや然然々々信信色色八八月月のの歌歌 エト 永永之之
 冬冬乃乃月月遠遠いい而而いいままよよりり 上サ 雪雪守守
 舟舟危危よよるるもも見見ゆゆややふふ仲仲水水山山 上ツケ 静静山山
 朝朝風風やや下下哉哉吹吹ぬぬああーーろろふふ屋屋 由由誓誓
 良良人人世世のの咄咄ーー吹吹ちち歌歌 境境のの那那 南南
 寒寒ききややひひととりりややああままハハ皆皆おおめめるる 耕耕雪雪女女
 流流くくとと流流るる居居るる所所ををいいひひ エト 英英鳥鳥

冬冬もも数数人人がが服服をを下下すす所所ををいいひひ 伯伯遠遠
 嘆嘆苦苦のの危危をを所所ををいいひひ 逸逸閑閑

植物

槲槲ふふくくももささくく水水がが喜喜ぶぶ所所ををいいひひ 山山外外
 即即乃乃ささららぬぬももいいままたたくく木木のの葉葉 淡淡翁翁
 松松ややああままにに不不道道ぬぬ水水ををいいひひ エト 小小松松
 手手とと足足ののつつ目目合合傳傳引引大大松松ををいいひひ 暮暮緑緑
 即即今今時時のの手手入入のの志志ををいいひひ大大松松ををいいひひ エト 暮暮前前

ね〜る〜く 増はあ〜ぬや六指引 幸布

夕々人門子な〜く 古指丸 エト 水よ女

こわれ麦生〜河原も枯燈加子 京 九起

う〜ら〜れぬ〜く 是〜る〜かきのみ ナニハ 五、藤

枯あや流きぬ〜れ風乃知と 嵐外

月〜け〜かき芦一葉〜れ〜り ムサシ 司休

生小鉄

子鳥熱〜家も〜つ〜り〜ん〜ん 風朝

鳴戸よたら〜けのさ〜んち〜り〜り 牟地

枝刈〜ち〜れぬ〜れ子鳥加子 ト子 仁里

水〜り〜や吹〜れ〜る〜る 登乃 陸 エト 旭洲

船子〜る〜浦の振るか〜り〜り イセ 雲石

心ゆ〜る〜あけや 鯨 実 頑布

衣念

一枝茶寮

口切やねの〜桂〜れぬ〜り 西馬

あまのついでに... 神代
降る... 水島
是を... 文良
納豆... 菊

神代

神の... 玉芝

箱忌

降る... 梅室

降る... 嵐島
風... 江月
降... 露島
降... 史来
川... 千高

公事

法... 色淵
名... 分尾

紫雲

煤掃の孫立をきく候恒根丸 上ツケ 之封

師乞十三日

此は江戸もきく古くある

草枕をくろよ

松笠にきく打掛ふききり エト 家之

坐敷をきく エト 月意

夏うちや エト 風藍

紫雲

箱刀の珠紋引 エト 忘き 遠閑

岩折 エト 貴河

より エト 龍凡

有る エト 聖堂

阿 エト 人

よ エト 同平

高 エト 高

ひらけりてはなれりてはなれりてはなれり

耕堂女

雑

いづれもふれりてはなれりてはなれり

風朗

街をたみたりてはなれりてはなれり

卓池

空もふれりてはなれりてはなれり

急関

舞もはなれりてはなれりてはなれり

梅室

偶述

さきもはなれりてはなれりてはなれり

西馬

火もはなれりてはなれりてはなれり

南上

余真

内子居くよくんゆるなり森子也

菊

川節をのりうちねるの相

菊

城山を降らぬ鹿乃らほひそ

菊

瓦能寛乃口を仕の屋敷

菊

月影の本屑井くらの灯

菊

客城まゝそく沙魚はるる

菊

何となく柿崎息久桐の筆味もく
利了くもむく 洗滌乃の類
看病能替りてんき紙紙り亭
君心さうりた言も通らぬ
鋪きけと漢の子供子せう海く
孝深ゆ敷くもむくも南
煤採の家例をかこくも也
最り月一 じゆんがけきく

信々きく鬼小洞とさぬたき
よの暮くくぬきおくも意
小意くくもぬらぬおの枝実亭
うきうきくも言もくも泥
永きりを素麴の若も替りぬ
ふの月越よさくもれぬ風邪
相越よ小屋の大種の間跡り
以牙少向能替りも 爲

持てとあきつて阿とを起す
 一いひあきつて阿とを起す
 青梅とあきつて毛虫の落つる
 一季あきつて尺中婦の差原
 我儘の麦食あきつて宵の月
 下地の子守のかくしの縁
 取次りあきつて遠さの梅子好け
 隣の世実あきつて以古む

三 南 三 南 三 南 三 南

占けつてあきつて石の合
 江戸の人あきつて意の鉄
 惣頼の望あきつて知れより
 一いひあきつてあきつて後
 岩戸川一押きつて料理屋
 離り名残あきつてあきつて

三 南 三 南 三 南

鷹もさうなればしあはれいともこれ
ゆりく 芦のうきく 雲風
埋火のうき 耕し 葱 明 亭
うき 妙けの 花 花 花 花 花
手巻のうき 結うき けの 善 花 月
阿まもありのうき 妙けのうき けのうき

突入乃序のうき 花 花 花 花 花
人子 結 花 花 花 花 花 花
妙角のうき 花 花 花 花 花 花
昔西便りのうき 花 花 花 花 花
咲き花のうき 花 花 花 花 花
折字のうき 花 花 花 花 花
手掛のうき 花 花 花 花 花
まゝのうき 花 花 花 花 花

紫草花如くもくもく白くあり
 三
 霜冷したやう是乃重多き
 南
 秋空をかへてさうつゝ盃紅月
 三
 出るゝ一すほゝゝ船丸火
 南

四時の際おぼやうなるも人々風疎
 寸はらむせのさうみしと候をうと 祇蘇
 多の考に自他の暗を照し 香の
 核屋志子嘉孝子何を能く 隆
 阿のハ名りた地必の初に定を能き
 世を親 予り自じを能中 物多然也
 命の初らえと教とまへしその惺れ
 ちるゝ古今風雅と碎は人の眠れ

角之く耳底にともかき
笑く言し 中々とい 従弟の遺志
美博の如くおる吟を 宗元
一碑一集を管い 蓋 存世
門 素先 師の 忠告 一に せや
形を 拙云 する 取下 け 實を せ
きも 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦
つと とい 抱 主 子 若 勝 け 志 公

何と云ふもつて 是れ ともかき
少くも せよ

保家山家 春 涅槃日
一可 希 度 子 筆 せ せ

逸 州


Handwritten text in cursive script, including the words "Franklin's" and "average" written vertically.

